

TOKUSHIMA



tokushima-shi



徳島県徳島市の郊外で「村社会の再構築」に向けた社会福祉法人の試みが始まっている。高齢者が安心して生活できる地域のあり方を摸索、良質な地域包括ケアの具現化を進めてきたのは社会福祉法人あさがお福祉会（理事長＝保岡正治氏）。2000坪の敷地には、医療・福祉の拠点、児童館、しゃれたカフェやレストランなどもあり、地域の人たちにも開かれたエリア。今年の4月にオープンした高齢者向け優良賃貸住宅と小規模多機能型居宅介護事業所の完成で、その構想はほぼ完結する見込みだ。



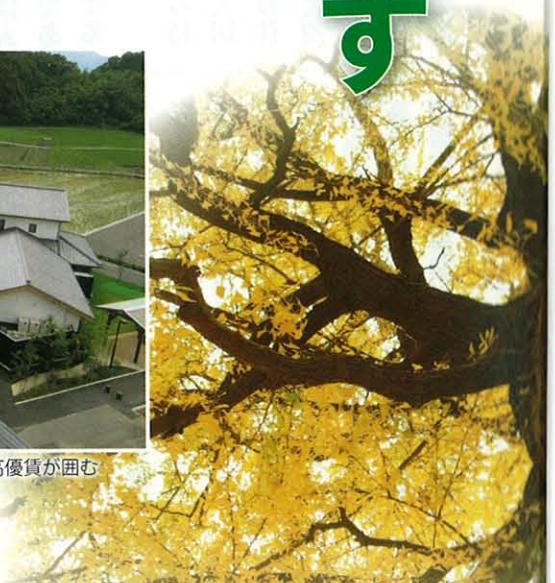
シニア向け長屋住宅あさがお邸の  
メインエントランス



中央にある小規模多機能型居宅介護事業所の周囲を高優賃が囲む

「シニア向け長屋住宅あさがお邸」「  
小規模多機能型居宅介護あさがお」  
(徳島県徳島市)

# 「村社会の再構築」をめざす



## 完成した「村社会」に 良質なサービスの息吹を

徳島県徳島市の中心部から車で15分。水路も多く、広々とした盆地が広がる。そんな地域の道路沿いに医療法人あさがお会「保岡クリニック論田病院」（47床・日本医療機能評価機構認定病院）が開業したのは昭和54年。現在はデイケアセンターと介護療養型医療施設として運営されている。

同法人を母体に、平成8年には社会福祉法人あさがお福祉会（理事長＝保岡正治氏）を設立、翌9年に軽費老人ホーム「ケアハウスあさがお」（定員50人）を開設したのを手始めに、訪問介護事業所、デイサービス、徳島市の委託事業としての配食サービスや生きがいデイなどを実施、地域住民の医療、福祉を支えてきた。

平成16年4月にはグループホームとデイサービスを同時開設、24年4月には、徳島県の建材を使った平屋建ての高齢者向け優良賃貸住宅「シニア向け長屋住宅あさがお邸」と「小規模多機能型居宅介護あさがお」を開設し、ほぼ「村社会」を構築するすべての建物が出来そろつた。



長屋に住む入居者と談笑する保岡氏（左）

「村社会の再構築」を進めてきたのが、同法人理事長の子息で、同法人理事でもある保岡伸聰氏（38歳）。若手の牽引者だ。大学卒業後は東京で就職し、地元徳島市に戻ったのが平成15年。それから9年かけて、この「村社会」を作り上げた。全国軽費老人ホーム協議会専門委員も務める。現在、同法人の職員は58人。その約半数が正職員で、残り半数がパート・契約社員として働く。

社会福祉事業の規模としては中規模で、経営はけっして楽ではないという。「小規模多機能型居宅介護事業所と高優賃ができる、地域の医療・福祉・住宅の拠点はほぼ完成しました。これからは、そこの環境のなかに、より良質なサービスの息吹を吹き込むことが課題です」と保岡氏は言う。その実現には職員一人ひとりの意識改革も必要になるため、これまでボトムアップで取り組んでいた。

そうした人の受け皿となる特別養護老人ホームは、どこも入居待機者が多く、おいそれと移り住むわけにはいかない。隣接してグループホーム（2ユニット）があるが、十分な受け皿となれない。

こうした実情をふまえ、税制

## 多機能事業所を併設

徳島県の高齢化率は27%。他県

と同様に核家族化が進み、ひとり暮らしの高齢者も増えている。多くの高齢者が土地や家屋を所有するが、収入は都市部の住民に比べて低い。福祉施設として低額で利用できる質の高いケアハウス（定員50人）は、つねにほぼ満室の状態。同施設の入居者の平均年齢は83・5歳と高齢化が進み、自立を原則とした住まいだが、実態は入居者の80%が要介護認定者であり、要介護3や車いすで生活する人もいる。

しかし、高優賃の建設に自治体は難色を示した。たしかに高優賃は国の制度としては廃止にすることが予定されていたが、自治体の判断で引き続き運営が可能である。問題はそこではなく、当時、県内に建設されていた高齢者専用賃貸住宅の入居状況がはかばかしくないのが理由だった。そこで農林水産省が、地元産の木材を使用した住宅建設を推進する「森林整備加速化・林業飛躍事業（木造公設施設整備）」制度を利用することを考へ、何度も自治体とやり合って平成23年に建築許可が下りた。

高優賃の定員は18人で、小規模多機能型居宅介護事業所の定員は25人。開設から約半年を経た現在、高優賃はほぼ満室。小規模多機能型居宅介護事業所も15人が契約し

ムダウンで職員を引っ張ってきたが、今年からは管理者会議の下にリーダー会議を設け、現場の声を聞きながら職員自身も責任をもつて事業運営にあたるという組織改正にも着手し始めた。

優遇や多様な福祉事業という社会福祉法人としてのメリットを生かし、ケアハウス並みの入居費用で、最期まで生活できる仕組みを考えた。自立した高齢者から重度要介護状態の高齢者までが生活できる環境を実現するため、保岡氏が着目したのが、当時、国が推進していた高優賃に小規模多機能型居宅介護事業所を併設することだった。

しかし、高優賃の建設に自治体は難色を示した。たしかに高優賃は国の制度としては廃止にすることが予定されていたが、自治体の判断で引き続き運営が可能である。問題はそこではなく、当時、県内に建設されていた高齢者専用賃貸住宅の入居状況がはかばかしくないのが理由だった。そこで農林水産省が、地元産の木材を使用した住宅建設を推進する「森林整備加速化・林業飛躍事業（木造公設施設整備）」制度を利用することを考へ、何度も自治体とやり合って平成23年に建築許可が下りた。

高優賃の定員は18人で、小規模多機能型居宅介護事業所の定員は25人。開設から約半年を経た現在、高優賃はほぼ満室。小規模多機能型居宅介護事業所も15人が契約し

ている。正面玄関脇には、地域住民も利用できるコミュニティレス

トラン「小料理屋うてび」を併設、高優賃の入居者も、昼食と夕食はこのレストランを利用する。

この長屋の延床面積は546m<sup>2</sup>。正面には、サービス提供の要となる2階建ての小規模多機能型居宅介護事業所を配置。その1階には、シアタールームや沖縄の墨染色の畳を利用した和室を備えたデイルームとコミュニティレストラン、事務室がある。その2階には約8畳の泊まり用個室8室が用意されている。トイレや水周りが付いた個室は手ぶらで来ても泊まれるようにと、ベッド、テレビ、冷蔵庫まで備わっている。浴室は檜風呂で、腰掛けて入浴できる特



「小料理屋うてび」は落ち着いた雰囲気

者から重度要介護者まで受け入れ可能で、自立者のエリア、中度者のエリア、重度者のエリアに分け、見守りやサービスを実施している。

自立者には自己管理を優先し、一般的の家屋と同じように、玄関があり、室内が人目につきにくい設計になっている。

一方、介護サービスが必要な入居者用には、室内玄関で小規模多機能型居宅介護事業所に近い位置に居室がある。このエリア分けにより、どんな人にも対応できる「村社会」が可能になった。

建物の設計で重視したのは、①高齢者にとって使い勝手がよいこと、②これまで住んでいた環境にできるだけ近づけ、住む人が誇れるような質であること、③明るいこと、④プライバシーが守られること。

また、大地震にも耐えられるよう、基礎工事に重点を置いた。居室はペアガラスの窓で、床暖房が入り、引き戸には軽くて弾力の

注の浴槽もある。

その小規模多機能型居宅介護事業所を囲むように、「コの字型」の形状で、一部が2階建てとなつた高優賃が建設されている。自立

あるバイオマス素材を使用。居室の玄関から室内が丸見えにならないよう、格子状の仕切りをつけるなど、至るところに造り手の想いがみられる。

## 法人と地域とのつながりを重視

とにかく驚くのが木組みによる建築。八寸の杉材を、柱や梁にふんだんに使用し、床材には檜を使っている。屋内にいながらも、森の中にいるような匂いが漂う。

「シニア向け長屋住宅あさがお邸」の界隈は、路地や格子のある京都・西陣の街並みを思わせる。

建設費は小規模多機能型居宅介護事業所と高優賃を合わせて2億8000万円。備品費は1500万円で、坪当たり単価は40万円。農水省から建設費補助が約1億円支給されたため、建設費の借入額は1億4000万円にとどまつた。木造にすることによって建設コストは、大幅に抑えることができた。

徳島県では高優賃の入居者への家賃補助額を上限1万7300円とし、開設後10年間は補助することを約束している。ほとんどの入

居者が上限額に該当するので、入居者の実質家賃は月2万2700円ほどであり、ケアハウス並みの低料金を実現した。

開設後半年でほぼ満室となつたが、口コミによる入居がほとんどで、同法人による普段からの地域の人たちとの交流が、こうした成果につながっているという。

保岡氏は、「社会福祉法人は、地域福祉の担い手として、地域の人たちを支え、支えられる関係性が必要です。そのためには、地域の人たちが日ごろから足を運んでくれる場所になることが重要です」と言う。

そのための取り組みの一つが介護予防を目的としたパソコン教室。平成18年から公益事業として実施してきた。パソコン教室は週2回開催し、月間で約180人が利用するまでになつて。とくにデイサービスの利用者のなかには、楽しみなパソコン教室にあわせた日程を組む利用者もいるようだ。講師は3人のボランティアが務める。取材で訪れた日も教室は盛況だった。

また、ケアハウスの1階にはコミュニティカフェがあり、コーヒー一杯で200円。その一角に

■ 社会福祉法人あさがお福祉会

## 「シニア向け長屋住宅あさがお邸」「小規模多機能型居宅介護あさがお」

### ● 住所

〒 770-8012  
徳島県徳島市大原町外籠46番地

### ● 電話

☎ 088-635-0286  
(シニア向け長屋住宅あさがお邸)  
☎ 088-635-0288  
(小規模多機能型居宅介護あさがお)



パソコン教室は人気のプログラム



入居者の橋さん（左）と宮村さん

は駄菓子コーナーがあり、100円玉を握った近所の子どもやその家族、そして入居者などが利用している。新しくできたコミュニティレストランには、カウンターとテーブルを設置、地域の高齢者が600円（コーヒー付）の昼食目當てに訪れているという。野菜素材を多く利用したメニューは好評のようだ。

外に出ると、近所のご婦人2人が犬の散歩の途中で、「村」に設けられた縁台に座つて話し込んでいた。会話には入居者が加わることもあるという。こうした、さり

「私の人生のなかで、こんな時がもてるなんて夢のようです」と話すのは橋さん（74歳・女性）。徳島市中心部から少し離れた山手で兼業農家を営んできた。夫の亡きあと、一人で暮らしてきたが、この高優賃の近所に住んでいる息子が、知させてくれた。「お母さんひとりでは心配だから近くにきたら」と言われ、実際にこの高優賃を見て、二つ返事で入居を決めた。これまで住んでいた場所と同じように、山が見え、田んぼが広

げない日常の交流が保岡氏の求めている「村」の姿のようだ。

## ケアハウスよりも低額で生活が可能

高優賃の入居者一人に住み心地を聞いた。

「私の人生のなかで、こんな時がもてるなんて夢のようです」と話すのは橋さん（74歳・女性）。徳島市中心部から少し離れた山手で兼業農家を営んできた。夫の亡きあと、一人で暮らしてきたが、この高優賃の近所に住んでいる息子が、知させてくれた。「お母さんひとりでは心配だから近くにきたら」と言われ、実際にこの高優賃を見て、二つ返事で入居を決めた。これまで住んでいた場所と同じように、山が見え、田んぼが広

がる環境が気に入った。

「週末は長年住んできた家に連れ帰ってくれますので、ご近所との付き合いもそのままです。寂しいと思つたことはありません」。

食事は3食ともレストランで食べ、自分で作らないという。

「ここでの暮らしで望むことはと尋ねると、「隣にデパートの『そごう』がほしい」と茶目っ氣たつぱりに返してきたのは宮村さん（84歳・女性）。隣接するケアハウスから移ってきた。徳島市内で戸建てに住んでいたが、いざれば

と思い立つて住み替えを考え、いろいろと情報を入手して、昨年「ケアハウスあさがお」に入居。その後、この高優賃に移り住んだ。ケアハウスも居心地は悪くなかったが高層住宅だった。「この高優賃は、これまで住んでいた家に近い

雰囲気と、木造住宅である点が気に入っています」。

二人とも遺族年金受給者だが、

入居費用もケアハウスより安いといふ。ケアハウスでは月額10万円強を支払っていたが、高優賃に来てからは月額9万5000円となり、安く利用できている。家賃補助もあり、実質家賃は月額2万3000円。これに加えて管理費2万円、共益費8000円、食事代が月4万2000円かかるが、お小遣いは毎月1~2万円あり、貯蓄もできるという。

社会福祉法人あさがお福祉会を訪ねて、これからは福祉も地方の時代だということを強く実感した。都市部の半分以下のコストで良質な住環境とサービスが提供され、住み慣れた場所で、最期まで安心して生活できる。ここには最後のセーフティネットとなる療養病床もある。

保岡氏の「社会福祉法人だからできる」という力強い言葉に、台頭する営利法人に福祉の場を譲れないという誇りを感じ取った。  
「21世紀型の村社会」のモデルを見たような気がする。

（シニアライフ情報センター・池田敏史子）